

## 二度の空襲に遭って

望月 トメ（大正12年生まれ）

（本体験談は、聞き取りにより職員が作成したものです。）

私は、6人きょうだいの5番目の次女として、関山村（現在の妙高市関山）で生まれました。長男は、太平洋戦争より前の戦争で戦死し、次男も戦争で負傷し、傷痍軍人となりました。

私は、学校を卒業してから「赤倉観光ホテル」で勤めていました。当時の赤倉観光ホテルは、国内外の貴賓や要人をお迎えするホテルで、天皇陛下もお泊りになられました。

そのような中、おそらく昭和18年10月頃だったと思います。私のところに「赤紙」が届き、「女子勤労挺身隊」として軍需工場への勤務が命じられました。私が配属された場所は、川崎市矢向にある資材倉庫のようなところで、飛行機や通信機器の部品などを搬出する仕事をしていました。昼間は、ずっと倉庫の中において、小さな窓から伝票を渡され、伝票に書かれている資材を渡す仕事をしていました。資材は、その伝票がないと絶対渡してはいけないことになっていました。近くに宿舎があり、4～5人位で寝泊まりしていました。そこに動員された挺身隊の女性たちは、北海道や秋田から来たと言っていました。少し経ってから、高田から1人の女性が動員されてきました。「あい」という名前だったと思います。私は、あいさんとしばらく一緒にいることになりました。

矢向に来てからしばらくして、川崎市に大規模な空襲が何度かありました。そして、あの日は、200機余りのB29が飛来し、大量の爆弾を投下し、市の中心部や工場が集中している地域は壊滅的な被害を受けました。空襲から逃れ、気がついたときには、辺り一面何もありませんでした。定かな記憶ではありませんが、夜の9時過ぎから朝の4時くらいまで空襲は続いたと思います。私は、火の燃え盛る中、川沿いを必死で逃げ、川の縁で草につかまって生き延びることができました。一緒に逃げたのは、4～5人位だったと思います。それから、3日位歩き続け、とある駅までたどり着きました。駅では、知り合いにおにぎりをもらった記憶があります。そして、窓が全てふさがれた真っ暗な貨物列車に乗り、長岡にやってきました。ずいぶん長い時間、列車に乗っていたと思います。あいさんも一緒でした。

長岡に来てからも軍需工場で働きました。宿舎にしていた元遊郭の建物には、私とあいさんしかいませんでした。近くには、山本五十六元帥の自宅がありました。寝る時には、いつも防空ずきんと雑囊袋<sup>ざつのおぶくろ</sup>※を枕元において寝ていました。そして、8月、長岡でもまた空襲に遭うことになりました。長岡空襲では、畑や信濃川沿いを逃げ、川沿いの竹で囲われた穴に逃げ込み一命をとりとめました。宿舎にしていた建物は空襲で焼失してしまいましたが、終戦まで、長岡の工場で働いていました。そして、終戦の日、工場でお昼に集められ、玉音放送を聞いたことを覚えています。周りでは、泣いている人もいました。じきに、挺身隊は解除され、郷土に戻ってきたのは、22歳くらいだったと思います。それきり、あいさんとは別れたきりで、一度もお会いしていません。うわさで、高田に帰ってきたと聞いたことはありました。

家に戻り、赤倉観光ホテルで働かないかとの話がありましたが、父がかたくなに断り、三男が働いていた青海捕虜収容所の厨房で少し手伝いました。そこも、すぐに閉鎖されました。

人生で、二度も大きな空襲に遭い、生き延びて、結婚し、子どもをもうけることもできました。90歳を過ぎて、戦争の記憶を皆さんにお伝えしたく、お話ししました。

※肩から掛ける布製のカバンで、中には配給切符など大切なものを入れていた。